



主張

Be Teacher!

古谷 雅幸

平成二十九年十二月、北海道教育委員会は「北海道における教員育成指標」を発表した。その中で、「北海道における『求める教員像』として、「○教育者として、強い使命感・倫理観と、子供への深い教育的愛情を、常に持ち続ける教員 ○教育の専門家として、実践的指導力や専門性の向上に、主体的に取り組む教員 ○学校づくりを担う一員として、地域等とも連携・協働しながら、課題解決に取り組む教員」の三つが示された。

それを受けて、広域分散型で小規模校の多い北海道では各学校における役割が一樣ではないという特徴を踏まえ、例えば「初任段階を一〜五年」などという数値表現をしない「養成段階・初任段階・中堅段階・ベテラン段階」というキャリアステージを横軸に、「使命感・倫理観」や「実践的指導力」などのキーとなる資質能力を縦軸として「教員育成指標」が示されたのである。

「子供の成長を担う教員には、いかに時代が変化しようとも、その時代の背景や要請を踏まえつつ、次代を担う子供たちを育てるといふ極めて重要な使命や責任をもつとともに、子供たちの人格の形成を担う存在であることから、その職責の重さを絶えず自覚し、自らが子供たちの道しるべとなるべく、常に資質能力の向上を図り続けることが求められてい



ます。」と示されている「指標」の冒頭の文章を読むまでもなく、学校教育の成果は私たち教員の質の向上にかかっている。

新学習指導要領を見据えながら教員の働き方改革を視野に入れた「学校経営」を進めるこの時期に、校長として過ごすことは本当に大変ではある。けれども、それを「重荷」と捉えるか「やりがい」と捉えるかは、校長自身が「学び続ける主体者」であるかどうかにかかっているのだと思っている。教員にとって「指標」はもちろん大切であるが、私は今でも、教員は子供に育てられ教員の中で育つものだと信じているし、学校の教員集団は「分らないことを分らない」と言えて、互いの弱点を補完し合いながら共に学び合える集団でなければならぬと思っている。そのような教員集団を築くために、私は教員一人一人が「学校にとって役に立っている」という自己有用感を感じられるように、全体へも個人へもメッセージを伝え続けられる校長でありたいと思う。

北海道は今年、「ホッカイドウ」と命名されて一五〇年の節目の年を迎え、それを記念する取組が行政と経済界が力を合わせて進められ始めている。北海道の有名人と言えばウイリアム・S・クラーク博士がいる。北海道大学の前身である札幌農学校の初代教頭を務めたクラーク博士の名言は、「Boys, Be Ambitious」(少年よ大志を抱け)だけではない。札幌農学校の校則を決める際に意見を求められたクラーク博士は、自由・独立・人間尊重を基盤にしてこの一言でよいと言ったのだそうだ。「Be Gentleman」(紳士たれ)」私もそれに習って、真に教員に伝えたいことはこの一言に尽きる。

「Be Teacher」(教師たれ)」

(全日中副会長・札幌市立中の島中学校長)